

谷崎潤一郎「女人神聖」論

——「女人」をめぐる——

西 莊 保

谷崎潤一郎の作品に五人の「光子」が登場することはかつて指摘したことがあるが、平成二年春に谷崎の全集未収録作品として発表された「小僧の夢」(大六・三・四〜四・一一「福岡日日新聞」)にも名前のみではあるものの光子が描かれていた。従つて六作となつた「光子もの」のうち、一作目「少年」の光子に続き、今回第三作目に当たる「女人神聖」の光子をとりあげたい。

さて、従来の当作品の扱われ方だが、これまで評価らしい評価はなく、たとえ言及されることがあつても、次の須永朝彦氏のように、由太郎の女性志向や零落譚に関心は向けられていた。

この小説は、由太郎が中学校の上級生で品性が高く容貌典雅な華族の令息に恋着されて交際するあたりまでは非常に興味深い展開を見せるが、途中から「明け暮れ、女のやうな美しさのみ憧れの情を寄せて」ゐたといふ設定が蔑ろにされ、女蕩しの美青年が身を持ち崩すといふたゞの零落譚になつてしまふ。

この由太郎とは対照的な半生を辿り、「女人神聖」の「女人」にあたるかと推測される光子に関しては、中井英夫氏が「結局は妹の光子だけがますます美しくなり優つて、由太郎の方は千束町あたりに落ちぶれて行方知れずになってしまう。」と由太郎との比較で一言触るが、あるいは、野口武彦氏や野村尚吾氏が「肉塊」(大一二・一〜四「東京朝日新聞」)とともに、「女人神聖」を「痴人の愛」のナオミのモデル、義妹せい子の片鱗を留める作品と位置付けるなかで片付けられて来た。本稿は、このように、これまで看過されてきた「女人」の光子に焦点をあて、「女人」の意味を追うことにより「女人神聖」を読んでいこうとするものである。

「女人神聖」は大正六年九月より翌七年六月まで「婦人公論」に連載された。顔だちが「左右の掌のやうによく似て」いる「さながら絵草紙から抜け出た」やうな美貌の兄妹、由太郎と光子は「互に器量を鼻にかけて」反目しながら育つ。相場師の父が死に、母が再婚し、二人は財産家の伯父、河田のもとで暮らす。由太郎の書生同様の扱いに對して、光子は河田家の令嬢の

ような待遇を受ける。最後には、由太郎が千束町の銘酒屋の兄いになったと噂される一方、光子は財産家の令夫人になるといふ対照的な半生を描いたものである。

1

「女人神聖」の前半部は次のような由太郎の女性志向を中心に展開していく。

此の世に、女として生れる事の出来なかつた彼は、せめて女に近い性質を持ちたかつた。女のやうな声を出し、女のやうなしなを作り、女のやうな色目を使つて、腸の底から女の気持ちで居たならば、或は自然と、自分の肉体に女性的変質が起こるかもしれない。(中略)

朝から晩まで、彼の頭を支配して居るものは、たゞ「女性的の美」であつた。彼は明け暮れ、女のやうな美しさにのみ憧れ情を寄せて、寝ても覚めてもその事ばかり考へて居た。

ただし、この女性志向は、単なる女性美への憧れで片付けることは出来ない。心身ともに開花し始める青春時代、その時期に、「たゞ女だけ」が「容貌を研ぎ、美衣を飾り恋愛の蜜をすゝる」「歓楽に耽ることを許されて居る」ことへの由太郎の羨みがそこにはある。

相当の家庭に育つた娘は十六七から二十前後の年齢になれば、大概配偶を持つことが出来る。相当の家庭に育たずとも、器量さへ勝れて居れば、藝者と云ふ職業を求めて、公々然と恋愛を語り、綺羅を纏うて居られるではないか。

このような歓楽を縦恣にする「女の境遇を羨むにつれて由太郎は女性的のものが凡て好きにな」るのであり、由太郎の歓楽志向を全うさせるのが女の境遇なのである。言い換えれば、歓楽に耽るのは女性の特権であり、女性特有の在り様ということになる。そして、この特権とは

行く末のことは分らないながら、現在では少くとも、自分より光子の方が幸福であるとしか思はれなかつた。由太郎がお洒落をすれば、父親が見るに見かねて叱言を云ふけれど、光子が好着物を着たがつたとて、叱られたと云ふ例はない。さうして、内に客があれば、妹の方は酒宴の席へ呼び出されて、大人を相手に、踊つたり唄つたり騒いだりして、やんやと喝采を拍したり、御馳走の招伴に与つたりするのには、兄の方は指を咬へて引込んで居る

と、既に光子がまとうものであつた。そして「行く末」もまた、成長するに従い「女らしい美しさが消え」ていく由太郎に比べ、「まるで人種が違ふやうに、優雅で、なまめかしく」美しくなり優つていく光子がそっくり享受していくことになるのである。伯父の河田に引き取られた後、書生扱いの由太郎に対し、令嬢同然の待遇を受ける光子は、「日曜になれば」遊山だ、歌舞伎だと連れていかれ、両手の指には「二つ三つの色の違つた宝石さへ光」らせていく。男性ながら歓楽の道を進もうとした由太郎が零落して行く一方、光子は「首尾よく」財産家の総領息子と結婚し、

河田家の令夫人となつてからも、光子の容貌はますます美しくなり優つて、屢々新聞や婦人画報の写真欄を賑はし、

三越や白木の広告のモデルにさへも使はれるやうになつた。彼女の名前は、才色双絶の年若き貴婦人として、普く都下に響き渡つた。

と対照的である。当時「女人神聖」が執筆された大正六年頃の「婦人画報」の写真欄とは、皇族、貴族を筆頭に、上流階級の美しい令夫人、令嬢で占められており、その美と地位の象徴である写真の一葉に光子の姿を重ねるを以て、当時の読者に、相場師の娘の破格の出世を印象付けることは容易であつたらう。

このように、由太郎と光子の対照的な半生を呈示することで、「女人神聖」の「女人」とは、所詮女性美にかなうことの出来ない男性に対して、歓楽享受の特権を持つ女性と、まずは考えられる。

前記したように、須永氏は、由太郎の女性志向の設定が途中で「蔑ろにされ、女蕩しの美青年が身を持ち崩すといふたゞの零落譚になつてしまふ」と述べていたが、これは、設定が「蔑ろ」にされたのではなく、むしろ由太郎像の破綻ととるべきではないか。由太郎の女性志向には、由太郎になぜ女性になりたいかを語らせることで、歓楽享受という女性の特権、光子の特権を諷いあげる目的が課せられていたのであり、この目的が果たされた後、由太郎は次に光子のライバル雪子を墮落させるべく、「女蕩し」になつていかねばならなかつたのである。由太郎は芸者巴に情夫扱ひされたあたりから、「己の境遇は、全く昔の人情本の中にある色男のやうぢやないか」と、俄に男としての享楽に耽るやうになつていく。だが、その一方「甘い涙に掻きくれないながら口説きたてるのを女の美点」と考えて人前でさめぎ

めと泣くなど、形ばかりの女性志向も窺える。光子を描くに振り回されて、由太郎像は破綻していかざるをえなかつたのではないか。

そして又、この歓楽享受とは、「天才」だ「聖人」だと賞されていた少年、春之助が快樂主義者に目覚めていく過程を描いた「神童」（中央公論）大五・一）に既に見られるものであつた。春之助は「半玉と呼ばれる女たち」を見て、「自然と」次のような考えに「導かれて」いく。

彼等は元來春之助と同じやうに、卑しく貧しい家に生まれ子供でありながら、たまたま美しい容貌を持つて居た為に花やかな色里の芸者の仲間選ばれて、年中あのやうな贅沢と自由とを許されて居るのである。（中略）あの少女等は美しきが故に大人と等しい凡べての享楽を与えられて居る。奢侈も生意氣も恋も虚言も、「美しきが故に」彼等は実行の特権を持つて居る。

この、「貧しい」家の子でありながら、「美しき」が故に「贅沢と自由」とが許されていると、羨望の眼差しで、一場面のみ描かれていた女性というものを、実際に男性と同じ舞台上に立てて、その半生を描いたのが「女人神聖」の光子であるとも言える。

さらに、「神童」と同時期に発表された「鬼の面」（東京朝日新聞）大五・一〜五）にも、「遊びたいと思ふ時に、いつでも好きな待合へ上つて、芸者が呼べる境遇になりさへすれば、それで人間の幸福は尽きて居るやうな気がする事もあつた」という快樂主義者の「貧書生」が、また、同年八月脱稿の「異端者の

悲しみ」(発表は翌六年七月「中央公論」)にも、次のような快楽主義者の姿が描かれている。

自分が今住んで居る陋巷のあばら屋の周囲にこそ、あらゆる醜悪や陰鬱や悲運が付き纏はつて居るものゝ、人間の世の凡てが此れ程に暗く冷たい物であらうとは信ぜられない。寧ろ反対に、思ふ存分の富と健康とを獲得して、王候に等しい豪華な生活を営み得る身分になれたなら、此の世は遙かに天国や夢幻の境より楽しく美しく感ぜられるに違ひない。(中略)たとへ王候の地位までには登れないでも、少しづつなりと現在の窮境から上層の社会へ浮かび出るやうになつて欲しい。

河野多恵子氏が「肯定の欲望」と言い表した部分である。前述の「神童」では、「貧しい」境遇からの脱出への憧れ程度であったものが、ここでは、極めて強い上昇志向となつて、「此の世」での快楽享受に関わり合つて居る。しかしながら、その上昇志向があるに拘らず、「異端者の悲しみ」でも「窮境」とあるように、これらの快楽主義者たちが、揃つて貧窮と不遇に処せられているのに対し、「女人神聖」の光子が、快楽享受の特権を持ち、相場師の娘から上層社会の一員へと、破格な出世をしていくのは、光子がこれら快楽主義者の夢の形であればこそそのものではなかつたか。

2

さて、その光子の上層社会への浮上だが、これは、光子が女学校に進学するところから始まるのである。

相場師の父を亡くした兄妹は、初め、母親お咲と共に伯父の仕送りで生活する。中学に進学した由太郎に対し、女の女学校は「贅沢」と、光子はさる華族の家の奉公勤めを強いられる。しかし、光子は「誰が何と云つたつて奉公なんぞに行くものか」と、女学校に行くか、さもなければ去者になると言つてきかない。そこで、伯父河田が奉公勤めを論ずつても光子に会うのだが、光子と話しているうちに河田の気が変わり、光子の女学校進学は突然許可されるのである。次の引用は、伯父が女学校進学を諾した時の一場面である。

伯父は斯う言つて、物凄い目を象のやうに細くして、桜色に上氣した光子の顔を、うつとりと見詰めて居る。

先から散々泣かされた為に、結ひたての髪がなまめかしく乱れて、折角塗つたお白粉のところ／＼剥げかゝり、衣紋も裾もしどけない姿になつて、ぐつたりと畳へ崩折れて居る彼女の風情は、芳年の三十二相の錦絵から抜けて出たやうに妖艶で、まだ十五歳の少女のやうには思はれない。

光子に魅了されたと思しき伯父の一存で、河田家より女学校に通えるようになった光子は、さらに「あの顔だちなら、今にいくらでも立派な所から貰ひ手がある」という河田夫婦の「婚姻政略」の皮算用に依つて、河田家の子供同然に大切に扱われる。ここで、光子の性は商品化されており、光子はその代償に、河田家の令嬢同然の地位を手に入れたのである。すなわち光子は女性の魅力によつて、自分の出自を越え、その地位を高めていく女なのである。

参考までに、谷崎の描く女学生像に注意しておくと、「薔」(「東

京日日新聞「明四五・七(一)の美代子は「相応に財産」のある商売人の正妻の子、「捨てられる迄」(「中央公論」大三・二)の三千子は「中流家庭の令嬢」、「美男」(「新潮」大五・九)には「高等官の令嬢」、「鶯姫」(「中央公論」大六・二)の春子は子爵令嬢、「小僧の夢」(大六・三(四))には洋酒店の「お嬢さん」、「女人神聖」の雪子は財産家の令嬢、「魚の李太白」(「新小説」大七・九)の春江と桃子は「お嬢様」と、女学生であることが一種のステイタスシンボルであるように用いられているのが殆どなのである。^(注1)ここで、奉公に行くべき身の上でありながら、奉公にも行かず、芸者にもならず、女学校に進学した光子とは、生まれ落ちた階層や境遇の殻を破り、女学生であることステイタスシンボルとする階層へと上昇していった、谷崎が描く女学生像に希有な女性なのである。これは谷崎の意図的な造形であろう。光子に似た設定と言える、「神童」の、お妾の子お鈴が女学生である。ただし、彼女の場合は、正妻死後、お妾の母親共々旦那宅に引き取られたのであり、また、お鈴は、正妻の弟をいじめ、書生を見下す程度で、光子のようなサクセスストーリーを辿るようには描かれていない。

さて、光子が女学生になるということは、上層社会への浮上という意味で、快樂主義者の夢の体現化の一ステップであったのだが、それと同時に、作品中のもう一人の女学生、河田家の令嬢雪子との対照から、光子の「女人」像を明確に打ち出す意図もあつてのことと考えられる。

二人が初めて顔を合わせた時、「満更醜い目鼻立ちではない」雪子も、「光子の傍に並ばせる」と、「下女とお嬢様ほどの相違」

を露呈し、体の発達も「水々と伸びて居る」光子に対し、「同い年とは思へぬほど遅れて」、「瘦こびて妻けて居る」とある。光子の美貌は、最初から二人の上下関係の逆転を明示していると言えよう。

雪子が光子に令嬢の椅子を奪われることになった最大の原因は、雪子が、財産目当ての由太郎の誘惑に「引き擦られ」た果てに妊娠し、河田家から親戚宅へと放逐されたことによる。その結果光子は、雪子の部屋を貰い受け、河田家の唯一の令嬢と成りすまし、雪子が河田家に戻ってきた際は、再び追ひ払おうと画策する。最後には雪子が、河田家の嘗ての書生と結婚するのに対し、光子は河田家の総領息子と「盛大な華燭の典」をあげるという結末を迎える。

不祥事を起こした雪子の姿は、作品が設定されている明治四十年代頃、世間で騒がれていた墮落女学生の姿に重なる。新聞雑誌が連載を組んでこそって書き立てたのはよく知られていることであろう。「東京朝日新聞」は、明治四四年三月二六日から五月一七日まで、「現代の女学生」を連載した。

明治四十三年秋九月頃から、四十四年桃花の季節へかけて、日本の主都東京市には、大変な俗謡が流行した。

其の一に曰く「アーメン、ソーメン、うんどんなどと、海老茶袴で、太鼓腹隠して、何と間が好んでせう」(中略)これ真に一部の女学生相を心憚なく言現したもなれば也

(明四四・三・二六)

明治の女学生について本田和子氏は次のように述べる。^(注2)

女学校は、華族女学校に代表されるような国家を背景とし

近代女性の製造の場であり、同時に一方では、海老茶袴に代表されるように、その特権性が薄められ一般化され始めた時代を迎えていた。従って、そこには、生まれ落ちた階層とその財力ゆえに、優雅に他愛なく「女学生」を享受し得る一握りの娘たちと、その身分を足がかりに、上昇気流に身を委ねて己の境遇からの脱出を企てる一群の娘たちが、隔てなく混在させられていたのだった。

「上昇気流に身を委ねて」とは、「魔風恋風」(「読売新聞」明三六・二〇九)のヒロイン初野が、妾腹の恥辱をそそごうと、「名譽ある女子学院の卒業生として、天晴婦人社会に学者の名を取らう」と学問で立身出世を志すようなものや、「青春」(「読売新聞」明三八・三〇三九・一一)のヒロイン繁が華族との結婚に心揺らすようなものなどがある。これらの、女学生小説としては代表格で、当時、大いに人気を博したという「魔風恋風」や「青春」で、幸福な結婚をし、幸せを掴むのは「本物の令嬢」「情夫狂い」と言われ、恋に破れ、果ては脚氣衝心する初野や、妊娠が判って華族との縁談を諦め、さらに墮胎の失敗をする繁など、暗い運命を背負うのは「上昇気流に身を委ねて己の境遇からの脱出を企てる」娘という構図に対し、「女人神聖」では、十人並の器量のお嬢様の雪子の性が剥き出しにされ、ジャーナリズムが面白がって書き立てる墮落女学生として描かれる。そして、女の魅力を備える光子は、表面上何ら不祥事を起こさず、無傷のまま、汚れ役になることなく、「上昇気流」に乗って女性としての出世をする。つまり、光子のような美や女性的魅力を持った女人には、生まれつき与えられていた社会的地位や境遇

など絶対ではなく、覆されていくものである。「女人神聖」は、時の、女学生という風俗をこのように取り込みながら、光子と雪子の対照を以て、谷崎文学の「すべて美しい者は強者であり、醜いものは弱者であった」(「刺青」という命題を強く打ち出している)のである。

以上のように、由太郎と光子、雪子と光子という対照の中から、光子一人が浮かびあがってくるという作品の構造を讀むことが出来る。快樂主義者の夢の形として登場した光子は、歎楽享受という存在の在り様のままに生きて「上昇」していく、女性美、女性的魅力を備えた「女人」なのである。すなわち、「女人神聖」の前半部分を通じて、快樂主義者の夢の形として導き出された光子は、後半のいささか風俗小説的な部分によって肉付けされ、一個の女性像として作りあげられていったのである。

題名の「女人神聖」とは、快樂主義者の夢を叶えることの出来る「女人」への讃歌を意とし、それは同時に、女性美、女性的魅力を備えた「女人」への讃歌ということになろう。そして、さらに、当作品を大正六年という谷崎の小説世界に置いてみた時、もう一つの、より大きな「女人神聖」の意味が見えてくるのである。

3

「女人神聖」が執筆され始めた大正六年と言えば、幻想的な素材や「永遠」なる美の発見が、堰を切ったかのように作品化されている。

初めて「美」と「永遠」のイメージが結び付けられた「人魚

の嘆き」〔中央公論〕一月、魔術師の美貌に魅せられた男が半羊神と化す「魔術師」〔新小説〕一月、平安時代に遡り、赤鬼となつて姫に懸想する夢を見る「鶯姫」〔中央公論〕二月、「永遠の實在を予覚」させる「美」を唱える「小僧の夢」〔福岡日日新聞〕三、四月、印度の宗教魔法を題材とした「女葬三蔵」〔中央公論〕四月、「ハツサン・カンの妖術」〔中央公論〕十一月、印度の神が夢に登場する「詩人のわかれ」〔新小説〕四月、来世の幸せを信じて心中する時代物「十五夜物語」〔中央公論〕九月、大正七年一月にはポードレルの詩に因んで「永遠」なる美をうたう「檻樓の光」〔週〕と続く。

これら以外の小説で、「晩春日記」〔黒潮〕七月は谷崎の母の死を記した実録的な作品であり、自称、自叙伝小説「異端者の悲しみ」〔中央公論〕七月の脱稿は五年八月である。「或る男の半日」〔新小説〕五月はお決まりの、金にルーズな小説家の話で、この頃に限つたテーマではない。

こうして削除していった後に残つた「女人神聖」〔婦人公論〕九月、翌七年六月が、やや風俗小説の呈もあり、女人の「美」の形容も全く地上的であることは、大正六年という枠に入れてみると、いささか不審にさえ見えてくる。そこで、さらにもう一つ残された「既婚者と離婚者」〔大阪朝日新聞〕一月)との関係からこの問題を考へてみたい。

「既婚者と離婚者」とは、妻に無闇に生かじりの西洋思想を吹き込んで「急拵への新しい女」に仕立て、離婚をスムーズに運ぶという話であるが、この中で、小説や戯曲を一通り読んだだけで「プリユウ・ストツキングの仲間入りをしたやうな気」

になつてゐる「新しい女」やら、「新しい女」を逆手に取つての批判意識が目につく。谷崎はかつて「われ／＼はイブセンの提供した問題に就いて、イブセンと共に反省し考慮する義務ありとするも」、それを劇にまで仕組んで展開されては堪えられないと述べたことがある。(劇場の設備に対する希望)、「演芸画報」大(二・四)これは、「内容の思想が外面の色彩に勝つて居る演劇」が「私の嗜好に適しない」という文脈ではあるが、「イブセンの提供した問題」への谷崎の認識については知れる。そして、日本の「新しい女」を批判したのは「既婚者と離婚者」一作のみであるが、逆に、一作しかないが故に尚更とは言えまいか、当時の「女性の覚醒」問題に就いて、認識はあつても容易には賛同しないという、谷崎の時代への意識が窺われるところである。大正六年とは、谷崎にとつて、不思議や幻想的な素材、あるいは「永遠」への関心が高まる一方、社会の女性の新しい動きに一瞥を払つた時期なのであろう。

「女人神聖」が執筆された「婦人公論」とは、「時代の動きや青鞥の運動に刺激され」(注14)、「女権拡張を主張として」(注15)大正五年一月創刊されたものである。

「刺青」以来性的威力を描き続けていた谷崎は、「婦人公論」への小説初執筆の際、その頃目していた芸術観を描くのではなく、最も本質的な女性の威力を、当世風に打ち出さんとしたのではないか。そこに、現世肯定派の、快楽主義者の夢の形としての光子の出世物語が引き出されてきたのである。光子ほど、世俗的な權威に裏打ちされて「上昇」していった女性は谷崎の作品で他に例が無い。

その出世物語を推し進めた女性性、つまり女性美、女性悪、女性的魅力、を備えた「女人」、それは谷崎が「刺青」以来屢々描いてきた女性であり、そうなること畢竟「女人神聖」とは、光子一人に対してでなく、改めて、そのような女性像への礼讃の意を込めた言葉であるとも考えられる。

ただし、「新しい女」批判をし、歓楽享受を女性の特権、女性存在の在り様と描く作家には、些か侮蔑に結び付いた礼讃であったかもしれない。

付記

「女人神聖」が、「光子もの」第二作目「小僧の夢」の執筆から半年経たぬ間の連載開始であったことを考えると、当作品での「光子」の命名はかなり意図的なものであったという推測が許されよう。

注1 拙稿。「[卍(まんじ)]試論—印度教による一つのアプローチ」(『日

本の文学』昭六二・四)

2 六作の「光子もの」とは、「少年」「小僧の夢」「女人神聖」「永遠の偶像」「腕力」「卍」であるが、谷崎死後に発見された創作メモの一端にも「光子」の名前が見られる。尚、注1の拙稿で、「光子シリーズ」としたものは、「光子もの」に統一する。

3 拙稿。「『少年』における光子像」(『稿本近代文学』平一・一一)

4 「近代双面譚—谷崎潤一郎のヘルマフロディト趣味」(『幻想文学』昭六三・四)

5 中公文庫『人魚の嘆き・魔術師』解説(昭五三・三)

6 『谷崎潤一郎論』(昭四八・八、中央公論社)

7 『谷崎潤一郎の作品』(昭四九・一一、六興出版)

8 由太郎の女性志向そのものを描くのがねらいであれば、設定は容易

には変えられまい。ただし、由太郎は本来、歓楽に耽る境遇を羨んでの女性志向であったが故に、「人情本の色男」への移行もありうる。しかしながら、当作品の前半では、由太郎の女性志向が極めて鮮烈に描かれているため、その印象が後まで残る中、由太郎は「人情本の色男」からさらに、女学生(雪子)を誘惑するごく普通の不良少年にまで描かれていく。由太郎の人物像の揺れは否定できない。

9 「悪魔」の照子は、特に良家出身ではないが、書生、女中のいる家庭の娘である。

11 「女学生の系譜」(平一・七、青土社)

12 雪子の場合、嘗ての書生との結婚とは言いながら、「法学士を婿に貰つて分家」したのであるから救いは十分ある。しかしながら、この結末は、不祥事を起こした二人、雪子と由太郎との比較対照から由太郎の零落ぶりをさらに強調させるものであり、これによって、雪子と光子との立場の逆転の意味は揺るがない。

13 大正六年四月九日付けの、瀧田哲太郎宛の書簡で、「去年の秋から暮れへかけて、『病褥の幻想』や『人魚の嘆き』を書き出した時分から、自分の芸術が少しづつ進歩しつゝある事を感じました」と谷崎は述べている。大正六年頃は、新しい芸術への摸索の時期であったのだろう。尚、以下列挙していく作品は発表年月をもとにした。執筆時期が明らかになされているのは、「人魚の嘆き」「魔術師」(大五・一二)、「女葬三蔵」「詩人のわかれ」(大六・三)、「晩春日記」(大六・六)であるが、全て発表時期より一月前に記されている。従つて、他の作品においても、およそ発表時期と執筆時期はこの程度に近いものと考えて差し支えなからう。(ただし、「異端者の悲しみ」は除く。)

14 嶋中雄作『回顧五十年』(昭十・十、中央公論社)

15 松田ふみ子『婦人公論の五十年』(昭四十・十、中央公論社)

*本稿での谷崎潤一郎の文章の引用は、全て中央公論社刊『谷崎潤一郎全集』全二十八巻(昭四一〜四五)によつた。

*本稿は一九九一年九月の筑波大学国語国文学会における発表をもとにまとめたものである。

(筑波大学大学院 文芸言語研究科 日本文学)